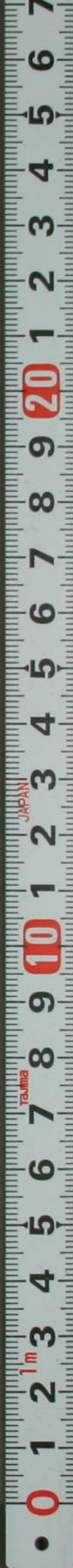




安政見聞録

上

71  
3755  
1



3755  
1

蔵書  
24.1  
蔵書



叙  
 古今の傳記と稱するもの中に汗一棟  
 元は志のまじり世界の廣き事案の多  
 端多し及び繁き故一賦ひて詞易ふも尤  
 漢文の書よかけら文字を減してそゆるの通  
 じありは目しするより。但漢先生が在漢前  
 漢書傳を門人等不繕して文字少記  
 を甲しるはう。或人の記ふも之を繕ば如何

古文月長

及下蔵

心も何れも... 事作る者の功し... 然りと  
 之も信筆... 片通... 固  
 今之身間... 文章の整...  
 信誅平語を新く善悪辨... 差別を...  
 見聞のま... 掲... 人毎... 撰...  
 専ら... 遠... 人... 子... 情あり。  
 喜怒哀樂の... 遊... 動... 心... 其  
 常を失... 平... 思... 深... 心  
 中

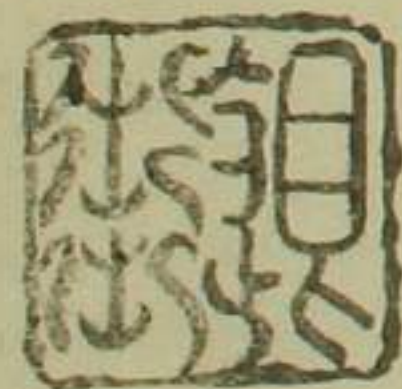
片ノ一

可感悟... 心... 變... 急... の... 時... 際... 思  
 を忘れ... 義... 闕... の... 物... 語... を... 具... の... 奉  
 へ... 推... 女... を... 勵... の... 一... 揚...

たのしみあり

于時安政丙辰庚夏

晁謙源文頭



安政見聞録卷中總目標

卷之上

地震の辨

孝婦非命に死するの條

孝女死期不紀念を遺す條

昇穢の老父又愛せ知る條

士人自身飢民を救ふ條

卷之中

父母に先づて適宜還て災ふる條

地震にうりて斤斤の肉を脱する條

流言を信ぜず六禍ひを招く條

地震の前後地脈狂ふ條  
地震の方角を以て條

卷之下

節婦衣を捐て夫の死骸を拾ふ條

父母を護るに成を忘る男の條

贅老未だを知らるの條

枕下より火氣を察するの條

神明飜民を憐み人の條

嵐土中より多く生る條

蝦蟇巨蛇と闘ふ條

通計十七條總目的畢







奉りては橋の方迄年  
本指めて祭らむ世物ふ  
る名はかり祭物にさ  
る年ありて神祇ひき人  
神火渡り初まむと  
るはかり 遠國安政二  
し好年十月廿音祭り人  
祭物に初まむハ酒神小  
く初月主神ありと  
るはかり 五子  
奉りては橋の方迄年  
本指めて祭らむ世物ふ  
る名はかり祭物にさ  
る年ありて神祇ひき人  
神火渡り初まむと  
るはかり 遠國安政二  
し好年十月廿音祭り人  
祭物に初まむハ酒神小  
く初月主神ありと  
るはかり 五子

一壽  
廿時







災害極まりなきに及ぶ。凡そ大北間災害のむりの地震不腐る  
 のなり。和漢古昔よりこの患へ史不見え所奉て載へざり。然  
 且ども史不いふ大北層人民牛馬多く死するとの載て其積  
 きをいふも今あるを察するにすぎ。近素越後二條の地震  
 及び文政の度系師の地震。天保の度信長の地震等ハ幸と云  
 ると甚遠うづべとのと。その傳はまる如函とありて。その精一と  
 知るが。嘉永の度東海道の地震ハ至て近きとあが。をこと  
 繕る人ふよりて大に差つるとある。傳は極めて定りある。人  
 馬の壓死成ひの空焼の本鏡をすて。その變異の度大なるを察する  
 の。然る大北都ハ地震甚稀ありて。折首小動ありしと。且も屋  
 瓦を墮とふの。俗ハ江都ハ掘抜の井と林を多敷に比

上ノ一

乳輩に教む。あをりて大層あるとあり。と人火不安堵せり。然る不  
 年安政二丁卯。十月二日の夜更の刻過るに暴小大地震動して殿  
 舎と破り民屋懷は倒る。この小ありて。八方より火燃出て。暗夜も宛  
 然白晝の如く。二十餘箇所の失火。鬼烟天と驚。民家の男女梁小  
 歩は成ひ棟垂木に壓はる。土庫の懷る。不費とて。死するりの  
 救と。む。適命全き由。物不校すれて。出ると。得む。親族との傍小  
 ありて。投んとす。と。か。火燭頭。更不近。ぐ。小及び。を救ふ  
 不遑。青為。活。火。燭。是。忽。小。灰。燼。と。る。と。憐。む。其。の  
 志。し。き。あり。ふ。ふ。の。凶。交。に。遭。て。成。ひ。の。壓。死。一。成。ひ。の。燼。死。一。成。ひ  
 の。折。り。て。廢。人。と。る。り。の。奉。て。算。へ。ざ。り。と。且。各。惡。人。小。あり。ぎ。且  
 とも。時。の。難。小。罹。り。て。泚。命。に。終。る。故。て。善。惡。の。差。別。を。同。む。その。時。小

妻つて善者といふとも免はくし難し。其時の不幸不幸の事いひ由  
 りにざる災に遭ひ強授必懼の時不わいて幸々至孝あるひい忠節  
 との心がけよき人の自う功を顯しうあ。今傳はさる如の二ことを  
 奉て後生と勵まを。然れどもその伯新姓名の詳あるも憚あきふ  
 あらねが紀さん

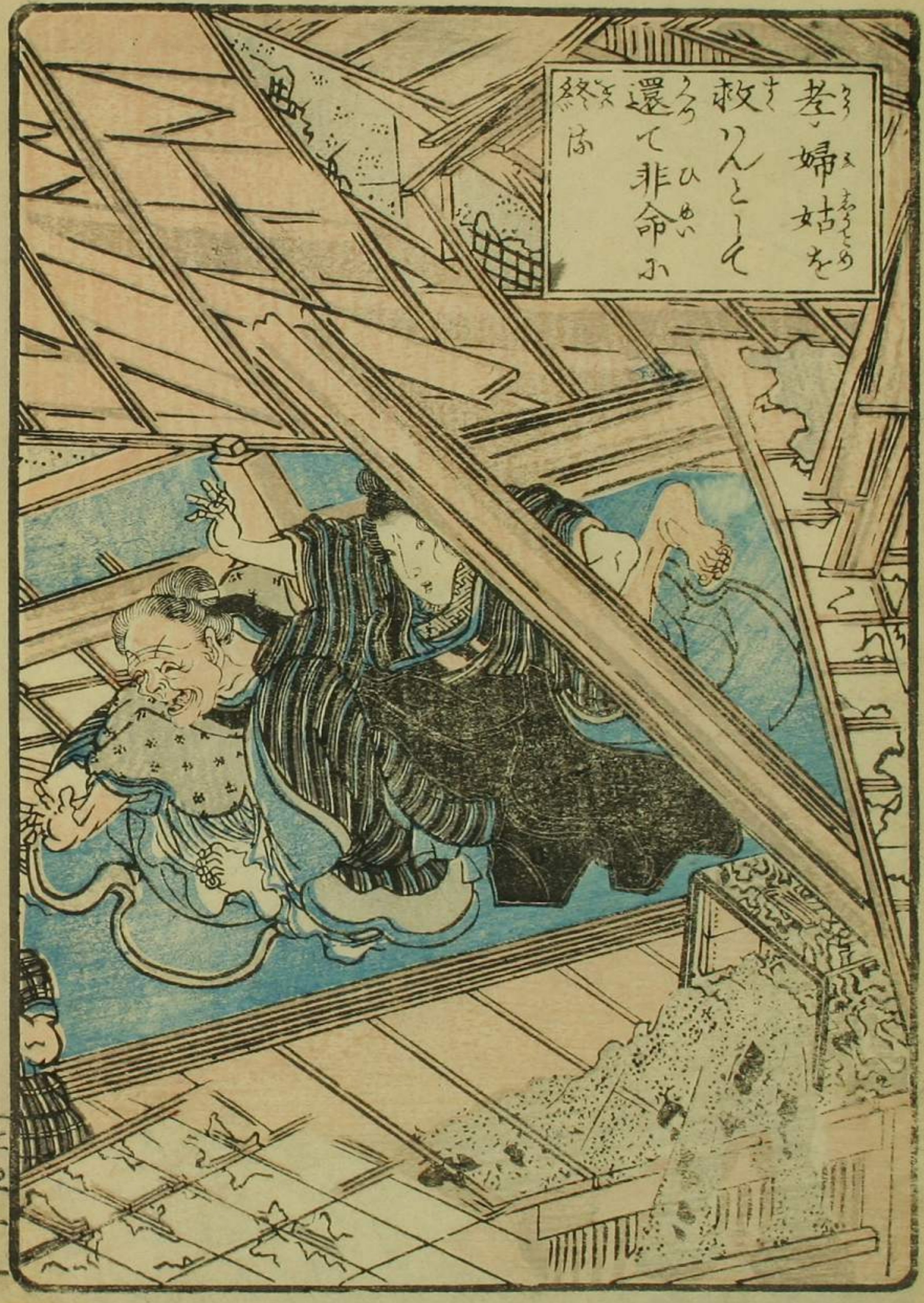
○孝婦紀今に記するの條

于茲武元十位高六日光道中の出に由て大小の旅店軒とあり。其  
 を跡といふとも警華あり。あふ何某といふ高賈の婦。その年二十  
 三あり。が。常に姑ふよく仕へて。孝婦とつけける。然るにその夜の  
 夏更ふあひ家内の男女十五六人破勢枕震よとのひ由果て外面を  
 奔て逃出るかの婦い子舎に在て汁線とつけける。夫不強きを汁と捨

夫庭ふをを淋ひりき。庭の方へ出する不瓦の落るに因ふ木の葉の  
 散ふ異るるに。蘇拾子由るるからに忽ち推け倒せし。六什  
 磨のうる孫車ぞと眼も腫と胸裏き。渾身戦慄と震ひつ。其如  
 に倒まを在けるが。倍と心づきては色をんすの。姑のつえざるは老  
 人の足弱くて出るひひし。のるるんと聲を激つふことを呼ば。葉の  
 むく姑の強きを逃出んと。身に記せしむと歩乃が。殊不燈火の頼  
 不消え心周章て途方にま。呻吟うらに震強く障子外は鴨居  
 めけて。初先小様より。進退の度を失ひて。更不坐する心此由る不  
 孫の聲して再さる。何方不在はと救四呼ぶ聲のゆる不姑の力を  
 て。意此知ぞと回答あ。そをを郷導ふ出んと。手は姑の聲を  
 まご家の内不在せし。頼此方へ出ると叫びあ。近入ると夫庭に姑



孝婦姑を  
救ふとて  
還て非命  
終ふ



を背に負ひ。さちおんとしるを。憐れ。その傍の柱撞けて二階の  
 梁そのうへふ落か。二人揃共小お倒さ。起あぐんとする由甲斐ま。  
 壓にうさまで。即時に死せり。妻下墜の用の車あり。他所ふあきて在り  
 けるが。枕倉に寝き止むと候て。むをう小地所。家内のおの心終  
 ろ。その傍を索ぬるに。巨はひの男女。大う。外面小ありぬきと母と  
 妻のあさる小寝き。さび。その家内。崩と傾き。お根落て内へ入る  
 きやう。もう。依こそ二人。この程に。呻吟あ。あな。と聲をあげ  
 名を呼べ。と更小對へ。あさる。さび。のよ。心あ。子。逃出。る。下。奴を呼び  
 よ。力を竭して。覆ひ。る。お根を穿ち。倒さ。る。柱。棟を。崩。く。小。取。除。て  
 ことを。う。る。に。妻の。背に。舟を。負ひ。その。ま。さ。知。小。俯。して。二人。と。もう。ち  
 遍。り。く。七。敷。より。血。滴。つ。月。由。あ。く。く。さ。ぬ。景。勢。に。お。悲。歎。小。さ。き。け。る。

船であるべきに。あさる。さび。の。頼。て。棺。を。懸。へ。香。華。院。へ。送。り。し。と。ま。ん  
 解。き。て。の。ま。く。婦。人。の。志。丈。丈。小。由。格。倍。ま。り。始。め。寝。き。て。前。後。を。願  
 こと。身。を。以。て。逃。さ。せ。し。る。事。人。の。情。と。い。へ。一。然。る。に。始。の。う。ん。え。さ。る  
 小。孩。き。震。初。を。懼。ま。り。被。擗。し。る。家。に。近。入。り。て。こ。ま。を。負。ひ。し。る  
 災。害。と。避。ん。と。せ。し。小。不。幸。に。て。津。命。に。死。に。後。に。こ。ま。を。解。き。し。る  
 始。め。逃。る。と。き。揃。共。に。体。ひ。さ。ら。の。難。い。あ。さ。る。さ。び。に。その。時  
 こ。ま。を。忘。ま。し。し。至。孝。と。い。ひ。く。と。是。の。理。ハ。慈。る。と。あ。る。愛。に  
 殊。こ。ま。初。ま。る。の。賢。人。君。子。の。上。小。と。ま。あ。る。也。男。子。と。い。へ。と。由。事。人  
 の。い。へ。一。心。不。動。さ。る。ん。況。や。女。子。に。於。て。第。この。婦。人。の。ま。ま。至。孝。と  
 稱。す。と。由。迄。意。あ。る。と。怪。し。む。初。の。ま。ま。志。ハ。あり。さ。る。僅。二。三  
 歩。の。間。而。て。死。を。免。る。と。能。え。さ。る。の。實。に。天。命。と。い。ひ。の。な。ら。ん

○孝女死期小紀念を託す條

夫小哀ををさめ、深川富川町の邊と云ふ。柏屋の何某者。以  
 前の有徳小善者。が薄命のらち續き。今ハ次第に困窮をて。仕  
 小の暇をとせ。之を夫婦に對ひて。いと淋しく送りける。十月廿  
 八日。再の年忌にあつる。小より心むりの佛子をいとまき。親き  
 人小由供養せん。同日ハ連夜とて。朝まで死より。野菜を畑へ。未  
 だど炊くをり。から。僅一二町を隔て。所に大工。何某なるもの、  
 娘二十をり。にたりける。が。月来親しく。性ふふより。今日の佛子の  
 佛ひせん。とて。その家に来り。いと甲斐なく。あつ働きた。夫婦が子を  
 助けける。かくて。今夜。時。以て。その小由。大工。果て。娘は。帰らんと。ひけせ。  
 柏屋夫婦ハ。あつを止め。を。其刻。小由。程。近う。ん。今。有。の。泊。して。

上ノ四

翌の朝。とて。帰ら。まよ。と。い。わ。ど。ふ。その。意。小。任。て。還。り。の。程。と。り。あ。り。
 せ。洞。度。ふ。と。推。か。つ。け。て。其。刻。由。り。あ。ぬ。を。其。懇。ん。と。床。あ。ど。敷。ん。
 と。し。さ。の。折。り。暴。に。虚。空。動。揺。り。その。お。お。に。覆。ら。ん。と。い。三。
 人。大。に。驚。き。て。表。の。戸。を。引。開。て。夫。庭。に。走。り。出。け。る。が。柏。屋。の。擔。倒。
 して。大。道。へ。横。た。る。今。少。し。遅。う。ら。の。擔。に。お。は。り。身。を。傷。ん。を。
 危。う。う。と。吐。息。切。て。跪。こ。居。る。か。の。娘。の。あ。ま。を。見。て。父。母。の。身。の。
 う。心。解。り。耶。ま。う。い。と。い。ひ。由。教。び。一。敷。小。道。出。に。夫婦。の。心。止。め。
 る。あり。今。諸。共。に。行。て。病。ん。要。時。病。ね。と。い。ひ。け。せ。ど。せ。え。や。ま。こ。
 せ。え。ず。や。回。答。も。せ。ざ。と。て。是。を。由。り。の。柏。屋。の。妻。に。向。ひ。目。来。より。
 て。孝。心。の。世。小。勝。ま。る。り。の。あ。ま。は。心。裡。然。由。あ。る。べ。し。程。近。け。せ。ど。
 夜。更。ら。り。一。人。や。の。帰。され。れ。我。の。跡。より。送。着。て。彼。家。へ。送。り。還。ん。

小おん身はあつ不在にて家を護まよとのひ捨て近出一が。此知等ハ  
 殊更此處劇く。且家此之奮奮之れバ。大う倒まざる家由あらば。  
 宛るに家並み六朝。由さける所小女の夢して嗟昔一助てよと呼ぶ  
 夢をほのきけバ。かの娘にや似たり。柏屋のいづりて。を知ら此知るを  
 ぶらぬに傍の襦の崩き下下。身を撲まれて記由あつた頻りに  
 叫ぶその娘より。柏屋よりより大お娘き。はまがこそ我と俱に誰  
 らかある道あらトを怪うねとてげり。とのひあがら橋口の倒ま  
 一折小子をうけて。引起さえとなりけまよ。生憎に初火きくして。入  
 の力に初由やうまよ。その名も小由老若男女。右性左性に群がれど。  
 親の子を見え失ひ妻の史を索秘る。呻吟あまが誰あつて。まよを  
 投んとするりのあらば。兎角方間に二三軒。あまがより火燃え出て。

正ノ五

忽此極火燃になり。燭八方に飛びあつるやどに。被響火よりよと銘くに。  
 崩き一家を掃除して。資材雜具をばきんとまよ。この時歴にまよをかくら。  
 まよ死やうに極火の為小燐まんとまよりの。夢を降りお泣き叫び助  
 けてよと人を呼ぶ。実に焦熱の苦一この。あまの道トとるやどに柏  
 屋の男等の夢に胸を打つと。真き狂ひ心急てかの初を揚んとすれ  
 ぶ力及むまよ。當下柏屋の妻の痛小娘まよ史を索秘てまよ小まよ。柏屋  
 へうこそ来ぬまよ。力を副てら初て引起せしゆわど。小妻由心の利言者  
 あり。彼方へ廻り。清きをうけ。力を究めて引けまよ。毎木壁土屋根瓦  
 ぬがよに重りたれ。あまがくた初う登り。史婦のまきりに心を焦燥て。投ん  
 一すまよと樹計あらば。その間小焼結る火燭の脱に近づくまよ。あまのよ  
 小及んとまよ。この時娘の弱果。果る夢を出して。史婦をゆび。あまの怒るまよ





氣のむくふあり。かの焼土へ池つきて。るるに娘の鳥け蕙つて。在り安に  
 似ゆつづい。昔さふ面のと土小衝入とてり。とてえ。このこの焼土。鮮  
 あまびうが女児と。知りておのく。長さまの何ふ論へん。やうゆ。同じ  
 ふと悲しと。人々に練め。死骸を野を送りせしとるん  
 舞してのち。天道の善に福ひ。悪小禍ひま。と然るにこの女子  
 死に遭ひて。生たか。その身を燐る。かすた急の時節に及び  
 後父母のうへを志ま。親友に死して死と潔く。かす志操あり  
 といども。非命に死するを免る。比。佛教に所謂有業とい  
 あまのこのこと。いふあらん

○昇後の老夫天変とわりの條

あり二三千石を領する家あり。その門番る老夫ありて。年来老

上ノ七

實に仕へける。元来昇後めて。文學もあり。昇後の豊か。り。
 十月二日の落着にあり。門外不出て。四方を瞻を。とちま。ち。肉  
 その同僚小示し。その。今宵か。ち。比。其。その動揺を  
 げ。か。ん。家。に。飛。ぶ。怪。我。あ。る。べ。し。着。て。用。心。を。ま。ま。に。着。ん。を。用  
 ん。と。他。さ。ら。ん。才。一。に。合。物。あり。と。て。暴。に。わ。の。米。を。炊。き。勝  
 ち。に。入。り。て。あ。ま。を。焚。く。同。僚。の。つ。て。諸。共。に。米。を。炊。き。焚。ゆ。あり。  
 頓て。老。丈。の。莊。内。を。弛。ま。り。て。人。に。その。よ。と。告。げ。る。に。こ。を。信  
 する。者。も。あ。り。ま。さ。波。老。丈。何。を。知。らん。と。て。天。變。地。妖。の。下。き。賢。人  
 君子。も。知。る。と。難。し。况。や。か。の。老。丈。を。名。よ。ふ。に。狐。狸。に。變。作。さ。ま。て。  
 かる。後。悟。を。以。り。の。る。と。多。く。朝。に。織。り。け。り。老。丈。の。飯。を。焚。け。



あみね下僕元救後の五三條の生まて。去ぬる文政十一年二十七日。子  
 たりけるが大地震ありて。家法も死するの救を知らば下僕僥倖  
 にその難免をばけまど失火に遭て。家法農具強もう焼失ひ後方  
 うて迷ひ出隣國なる伝流へ行き。こふ月日を送る程に弘化四年二月に  
 まつた。大土地震あり。折しも善光寺如来の用帳のと振りとて。ま  
 素福の人夥しく。小集會するの故に。即死怪我人多うり。人の皆知  
 る所にて。その節も僥倖に。恙なくして。まより後。即ち来り年久しく。出  
 恩を蒙らうり。然るに。最初三條にて。大土地震あり。こも。情激る人  
 のまじ。あみね大土地震のあり。死ひ。天を憐憫とて。空近く。星の光り。あ  
 け。倍ま。温暖するの。こ。ゆ。ま。今に。名。ば。毎夜空をうら。あ。早  
 業の。こ。あ。心。を。安。ん。下。ひ。ひ。が。信。及。地。震。の。二。月。中。に。被。別。一。等。と。氣

上ノ九

強き。こ。の。以。十。六。で。温。暖。する。業。に。あ。る。と。存。せ。し。ふ。その。前。夜。より。早  
 の。光。り。殊。ふ。大。き。く。と。昂。泰。の。中。の。小。星。作。小。糖。星。と。増。る。の。の。鮮。明。な  
 る。もの。の。こ。ろ。著。目。な。り。特。殊。な。立。離。子。を。和。す。て。あり。於。て。こ。の。地。震。の  
 兆。と。親。し。き。人。小。の。こ。を。若。竊。に。准。信。し。け。る。果。して。その。翌。晩。大。地。震  
 の。あ。け。こ。と。准。信。せ。し。ま。怪。我。も。あ。る。を。これ。と。ま。こ。此。如。く。も。家。法。も。こ  
 失。ひ。ぬ。ま。ど。誰。方。も。て。何。都。へ。出。ぬ。や。小。老。老。救。を。ま。す。て。死。し。る。中。に  
 恙。も。死。ひ。金。く。その。前。兆。を。あ。ら。た。る。故。こ。ま。より。後。の。ゆ。く。信。下。て。空。中。候  
 が。び。る。夜。も。あ。る。び。然。る。に。一。面。目。ま。地。震。の。兆。あ。る。故。を。あ。ら。た。る。せ。し  
 ごと。人。小。の。著。目。な。り。果。族。の。老。の。ゆ。と。悔。り。も。ひ。人。の。ま。く。道。り。ひ。け。り。ま。こ  
 ま。を。信。せ。し。入。り。ま。の。恙。も。存。在。す。る。こ。下。僕。が。救。び。ま。す。と。い。ひ。り。し。る。人  
 め。て。野。ま。小。功。の。老。あ。り。と。い。ま。り。と。ま。ら。の。ゆ。り。と。大。小。敷。息。せ。し。れ。り。と。い

正長月金

長下 歳

接るにこの叟がて。実に後來の心ゆくとす。和漢之才國會枕卷  
 の條にゆき。地中に竅あつて轉の果のてく。水溜り陽氣を以て  
 以。その陰陽相和して宜きとゆるい事なり。陽氣滋潤して出るとを  
 得ん歳月を接べ地脈を水流する。故に井の水涸て時氣暖之變り  
 陰陽解と交る時火氣遠まはるの陰陽解。是と其の理にき通しとを  
 震之する時に蒼天昇くるなり。星の天さ常に倍してなるは地升り  
 天の降るは雨なり。是の時山の雲過きてく既に伏陽發出す。其  
 ときを為に地震動はるとして始め震る時を極烈なりといふ也。その  
 次の陰陽解。その後極動ありありは火ののまき出まざる也。乃至半  
 年一季也。その後震あるの之。但大地震の時海の汀波流涌騰し思  
 き浪山のてりけに浜る。世よほどと夏奈美といふ。是服之所の地暴に降

正十

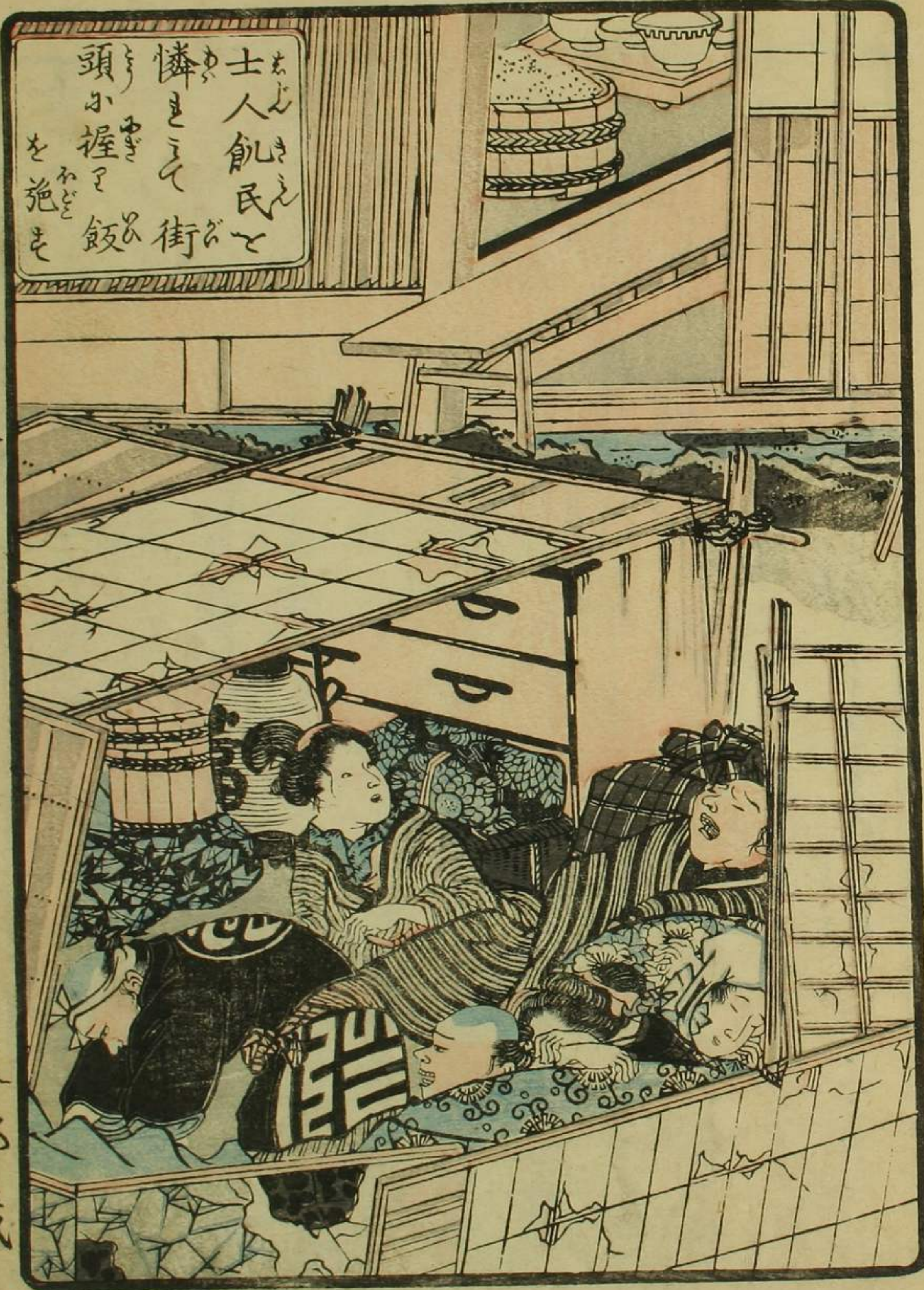
元沈むれとてその洋中の波靜にして其にかならば夏奈美といふ海  
 岸の之云。かの叟が星とて。夏奈美を察しつる。この説にかなら  
 ず。附てその時に昇後の海が云。海に散て用心せざる人多く喪亡  
 するとの一文不知の老妻あり。その考る所ありて。言出るとを極べ  
 うらば守活捨造物籍にゆき。唐に一人の老媪あり。朝とて死て後  
 なる岳にありて降ると。暑氣騰雨に拘らる。以月の務とす。うらと。  
 人との心を知らず。多し。是を察ひり。かくて一時弱官者老媪に以  
 て。と問けるに。老媪答て。その山に年奮る古墳あり。傳へての以  
 古墳に若血の著とあり。其の邑忽沈澆海とある。と亡反のゆれ  
 たり。固てその若き節より。朝頼起てまの。見とる。一糸を始め春  
 等とす。其のふあせんと。つて弱官者。大小笑ひのつて。さる。

あるべきと朝りて澤に各密結りて居り。彼古墳に血を著て老  
 媼を愛作慰まむ。よき一真なるんとして小物の死してを索ね出  
 一腹を引裂て。かの古墳に塗つておたう。老媼の初ともあらずして  
 明の朝岳に登り。古墳をぐるに量針らん。段血の著てあらん。あふ  
 於て夫小狭き山より持がうやく。近下りて吐息ゆき。今日この邑  
 に大憂あり。疾く細髪を片月て一刻由早く山に登ま。然ちくも  
 命先ふらうんと言於てまき走り出邑の肉を地まらう。あまを若  
 おける。この老媼があまを老人の何をのりと疑りてあまを人ども於  
 おくべきにあらざる。頼に資物雑具を緘げ。宛然急火の出来一  
 下。周章て山へ逃むる邑の肉も心ごと。垂打る者いことと  
 して。日未より津候る。老媼が云放あらん。と是に隨ふ者あれど。

多く先老の纏結し。悔りて勅うぬあり。殊に彼弱官等へ老媼  
 程ひ喋ぐせんと。信をそとて指き。あふ。かくてその日未刻さるる  
 暴に大比慮動して。残るかく海に没し。僅ふの岳を透せり。こ  
 ろ終て山へ逃登り。若者の外に。こゝろ悉く死ふけり。とぞ。これ  
 古墳へ段血を著し。弱官の所為あれど。その時あてそのとある  
 こそ。既に天女の兆あらめ。匹夫匹婦の言とゆ。ど母時として發り。  
 その昇きをりて悔る。道あらぬ人といふん。

○士人自此飢民を救ふ條

或人の物語に。一人の武士あり。元来薄祿ありて貧し。といふ。常に  
 悪の志あり。然るにその夜大震して。その家半傾きけ。とど朋らに  
 訴る。わづ安堵の思ひをな。近隣よりいれおるん。親しき人の



江戸大目録

月吉



三ふそん初てのゆとく迷惑あり。半にて絆一のとゆども可ばこま  
 愛ましと携に腰せうち掛て。初くべき絆由ありは急を急と君の  
 家族我個在まう存せむ。この半にて一飯の絆は是りゆきを法て此  
 如此宣ふと吾們違て行燈を出しとて各ありて責るここの西刀で  
 半のみに似合しうび曲てこの義の絆させるとゆに武士急改て吾  
 我族に食まのあり賣トとのをまどて責ん我れ此とゆて極飯を  
 持出ししが器小さくゆがまに施しゆび遺憾にるよその折る。あ  
 に行燈のありて。近入まはる飯あり。今おめて飢人に与ふとゆ  
 なるゆとゆて亭主はらう笑ひ。よ飯とて由二升有り限り由ありぬ  
 飢人を十分が一由救ひ雅けん。始め施しゆゆて由志の達しと。このゆ  
 果ぬに武士がゆゆ我分際にて。我個の人を救ふ汝が言て俟ば

上ノ十三

一。我ゆよくそむく初まり。然まどゆも懐に些むりの黄金をば  
 ばその限りは救んと元来は情状あり。汝ゆまけて我ゆよさば陸徳の  
 端ともありん。去来極くと首にかけら。炊桶をさつとゆの亭主  
 このとれ忽地小形とめて武士と作き祝て額著る。さて由賢き由心  
 うふ。世に善老のありといへども君が如きは稀なるべし。その志とて承  
 まは。何条否むてありん。僕を索めまこの飯を君にまらし。ゆは  
 初ては君まき肯ひのり。固て白米の料を受脚あがら薪の代り君に  
 カと合さんゆ。まき免しゆとゆ。武士ゆて大由款び別件の飯と  
 極り。持出てまかある人小施して帰しとて

按るにこの武士。かゝる凶暴の時にあひて。家の破壊を顧みず。元  
 より事足る身にもありぬを。資財を損て飢民を救ふ。実小善

江正身目録

月音





持主

谷屋利玄

紅印